

コリント人への手紙 第一 第8章 1～2節

「私たちはみな知識を持っているということなら、わかっています。しかし、知識は人を高ぶらせ、愛は人の徳を建てます。人がもし、何かを知っていると思ったなら、その人はまだ知らなければならぬほどのことも知ってはいないのです。

使徒の働き第3章17節にある「無知」という言葉が刺さる。

あなたがたは自分たちの指導者たちと同様に、「無知」のためにいのちの源である主イエスを十字架にかけたのだとペテロは語る。

当時イスラエルの民は、救い主が現れて自分たちを救ってくれるという知識はあったはずである。そのことさえ知らなかった純粋な無知であれば、何もイエスを十字架にかける必要はないはずだ。病人を癒し、悪霊を追い出し、死人を蘇らせ、良いことづくめのことをしたのだから。

しかし彼らはイエスを十字架に架けてしまった。それは救い主が現れるということを知識として知っていたからではないだろうか。その救い主とは、例えばローマの圧政から救い出してくれるカリスマ性に富んだ救い主であるはずだという人間理解の範疇、いわゆる常識、敢えて言ってしまうえばそういう偶像だったかもしれない。彼らにとっては、間違っても罪人や取税人と食事をし、遊女に憐みをかけるような救い主ではあってはならなかったのかもしれない。

こう思う時、私たちは何と簡単に「無知」になることかと思わせられる。そしてこれはキリスト者も決して例外ではないと思わせられる。多くの説教を聴き、聖書を学ぶにつれ、むしろ硬直化した捉え方しかできなくなってしまう恐れが常に潜んでいる。

「知らなければならぬほどのことも知ってはいない」ことを常に覚えたい。